オシム辞任発表後のさまざまな反応

●サヴィチェヴィッチは悲観的

"赤と白"(注：レッドスター・ベオグラードのこと)のシーズンは、少なくとも公式戦に関する限りは終了したが、コーチ陣はまだ選手を集合させている。デヤン・サヴィチェヴィッチも練習に参加しており、ケガからの復調を欧州選手権開幕までには間に合わせたいと願っているようだ。

「今のところは回復のためのトレーニングが多いけれど、6月5日までには準備が整うと思っている。少なくとも70分はプレーできるだろう」とサヴィチェヴィッチは語る。

――オシム代表監督がスウェーデンに行かない可能性についてはどう思いますか?

「"シュワーボ"にとって辛い状況なのは分かっている(編集部注：シュワーボはオシムの愛称で「ドイツ人」の意味。子どもの頃に金髪だったことからつけられた)。もし彼が行けないのなら、今までしてくれたすべてのことに対して感謝するしかない」

――ユーロ92の勝算は?

「こんな状況になってしまったからには、あまり大きな成功は望めない。恥をかかずに済むことがいちばん重要になりそうだ」。

デヤン・サヴィチェヴィッチは、かなり悲観的な予想を述べた。

●ノヴァクはジレンマに

スウェーデンでプラーヴィの指揮を執らないというイヴィツァ・オシム代表監督の決断が下されたあと、ジョニ・ノヴァクの意見を聞くのは興味深いことだった。ノヴァクは、"ボス"抜きで欧州選手権に行くべきではないという意見を、パルチザンの選手の中でもっとも声高に主張していたのだ。

「それでも、オシムがそんな行動をとるとは思っていなかったんだ」と、ノヴァクは電話でのインタビューに答えた。

――今はどうです? オシムと同じことをするつもりですか?

「分からない。考えている最中だ。ジレンマに陥っているよ。選手は遠征に参加する理由を探さなければならない。今までその理由はオシムだった。僕のキャリアにおける恩人だ」

――スロヴェニア・サッカー協会は、あなたがスウェーデンに行くことに反感を持っていないのですか?(編集部注：ジョニ・ノヴァクはパルチザン所属のスロヴェニア人。スロヴェニアは1991年夏の時点で独立国家だった。それでも、ノヴァクはダルコ・ミラニッチと同じく1991－92シーズンもユーゴ代表でプレーを続けた)

「許可をもらったのは事実だけれど……今は二つの共和国しか残っていない(編集部注：セルビアとモンテネグロのこと)。かつてのユーゴスラビアはもう消えたんだ。これから家族と話し合って、それになんとしてもオシムとも相談したい。その日のうちに結論に達するはずだ。スウェーデンでプレーすることが選手としてのキャリアの中で大きなポイントになるのはわかっているんだが……」

●ヴヤチッチは異議無し

かなり長い間、パルチザンの選手は監督(編集部注：オシムは1991－92シーズンのみパルチザンの監督も兼務していた)と話をしたが、結局答えは出なかった。ミヤトヴィッチ、ヴヤチッチ、オメロヴィッチ、ノヴァク、ブルノヴィッチ、スタノイコヴィッチ……。彼らは何度も、オシムにスウェーデンで指揮を執ってほしいという希望を口にした。だが残念ながら、オシム抜きでスウェーデンに行かなければならない。

「代表監督にとどまるのに、スウェーデンには行かない? 腑に落ちないことだが、オシムの気持ちは十分に理解できる。すさまじい精神的重圧に苦しんでいて、何日も眠れずにいるらしい。たとえ本人が行きたくても、あれほど大規模な大会にはつきものの大きな精神的労力に耐えられないだろう。オシムのとった行動は理解できるし、その決断を受け入れたい」

――あなたは長い間オシムを説得しようとしていましたね。

「オシムは公平だし、高潔な人間で、偉大な指導者だ。とても尊敬している。指揮を執ってもらえればチームがはるかに強くなるのは事実だけれど、監督の考えも理解しなければいけない。家族や親戚や友人のことがさぞ心配なはずだ……異議を唱えることなどできないし、唱える権利のある者は誰もいない。オシムは国際人で、国家主義的な激情には関心を持たない人なのだから」

●ラディノヴィッチは光栄と語る

レッドスターのフルバックを務めるドゥシュコ・ラディノヴィッチの元に、素晴らしい知らせが届いた。ユーゴスラビア代表のユニフォームを着て戦うメンバーの中に選ばれたのだ。

「正直言って、招集されるとは思っていなかった。でも呼ばれたからには、これほど大きな大会で代表ユニフォームを着るのは光栄だと言うしかない。与えられた信頼が正当なものだと証明できるよう、全力を尽くすつもりだ」と、ラディノヴィッチは語っている。

会長はオシムが代表監督にとどまることを繰り返し主張

ミリヤン・ミリヤニッチは、昨日も頑なな態度を貫いた。以前の発言を変えようとせず、第一級のファイターであり続けた。「皆さんに我々の考えを理解してくれと言い張っているわけではない」と、報道陣に語りかけたミリヤニッチは、どう見てもユーゴ代表を大切に思っていない人々もこの場にいるということをほのめかした。

「でも、ユーゴスラビアサッカー史上もっとも成功した人物のために戦っていることは理解していただければと思う。我々の結び付きは深く、オシムの素晴らしいところは常に変わらぬ人間性とサッカーに対する献身的な愛だった。そしてだからこそ、我々はオシムが今後も監督を続けてくれるよう主張を続けるつもりだ」

ミリヤニッチの心の中で激しい嵐が吹き荒れているのは明らかだ。一昨日も、嘆かわしく不快な質問にさらされたとき、一瞬たりとも引き下がることはなかった。

「我々は諦めない。これは信じてもらっていい。望みは捨てていない。これまで何年も戦ってきた。最年少選手のために、マッサーのために、医療スタッフのために――だから、代表監督のためにも戦う。なぜなら、オシムは我々の悪しき伝統を断ち切り、世界的監督となってくれたからだ(編集部注：以前の代表監督は短期間で解任されることが多かったのに対し、オシムは6年間も順調に監督を続けてきた)。だから皆さんには、専門家として、そして人間としてご協力をお願いしたい」

どの質問に対しても、ミリヤニッチは即答した。だから、新監督は誰になるのかと尋ねられたときには、かなり辛辣な口調で次のように説明した。

「代表監督はオシムのままだ! この辛い時代というモザイクの断片がもしも全部組み合わさったなら、これからでもオシムがスウェーデンでプラーヴィと共に戦えるよう努力する。だが、状況がどう変わるにせよ、代表監督はオシムだ。ユーロ92で選手のそばにいようといまいと」

――ですが、誰が選手に働きかけて、誰がチームを選ぶのでしょう?

「オシムはコーチングスタッフを任命している。だから、その点については問題ない」とミリヤニッチは答えた。

――イヴァン・ツァブリノヴィッチとヴラディツァ・ポポヴィッチのどちらが指揮を執るのですか?

「指揮を執るのはオシムだが、ツァブラとヴラディツァはきっと熟練の手腕で仕事をこなしてくれるだろう。これはもちろん、このチームを作り上げた監督が、彼ら二人をさまざまな方法で助けるという意味だ……」

そして、協会会長の話はここで終わる。あとは最近何度も繰り返してきた言葉を付け加えただけだった。「新監督を探すつもりはない」